

ふるさと風

第81号 (2013年2月)

風に吹かれて (59)

白井啓治

『残雪を割って露の臺 顔を出す』

成人の日に降った雪が、その後が続いた寒波のせいで半月近く残っていた。斑に溶けた雪の間から露の臺が顔を出した。まだ小さくかたい頭ではあるが、春がすぐ隣までやって来ていることを思わせてくれる。

季節は異常気象だとか何だとかいろいろ言われながらも確実に移ろっている。暑さ寒さの度合いは近年毎年大きな変動を見せているが、一年三百六十五日が変わらぬ限り、時の移ろいに伴う日の出、日の入りは変わることなく確実にやってくる。この一年のサイクルが変わらない限り、この地球の上に吹く風の強弱など地球としたら些末な事と言えよう。露の臺の頭が見えたら、春が隣りにやって来た素直に感じとればいいだろう。

さて昨年暮れ近くから、日本列島に色々な騒動が巻き起こっている。中でも大きくにぎわしているのがスポーツの場における体罰であろうか。反抗を禁じられている中で暴力を持って従わせても、その選手が強くなる事は決してない。ましてや世界の競技の場で勝利できる選手には育たない。

石岡に越してきて間もない頃に、プロゴルファ

ーを目指す青年を預かりメンタルタフネスとスポーツ作文力について指導したことがあった。フィジカル能力の優れた青年であったが、メンタルタフネスと競技力を左右するスポーツ作文力がほとんど開発されていなかった。

スポーツの場では「根性」「集中力」が絶対神のように信じられ、靈験あらたかな経文の如く使われているが、根性も集中力も全く意味不明でスポーツの向上に重大な意味をもたらすものではない。むしろ才能の芽を摘む言葉であろう。どうしてこんな言葉がスポーツの場における金科玉条のごとくに勘違いされてきたのだろうか、その指導者たちの頭の悪さには呆れ返ってしまう。

根性と言うのはその人が生れながらに持っている基本的な性質の事をいうものであり、集中力とは広辞苑にも載っていない意味不明の言葉である。「根性、根性、根性!」「集中力、集中力、集中力!」と呪文のように唱えてもスポーツのスキルが上がる事はない。預かったプロゴルファー志願の青年も同様であった。体育大学出身であるが、競技に一番重要な作文力が全く養われていないのであった。体育大学では、スポーツ心理学など才能の育成に欠かせない重要な授業・講義が行われているが、学生たちには人気がないようである。

プロゴルファーを目指す青年を預かった頃、小

ふるさと風の会会員募集中!!

ふるさと風の会では、「ふるさと風の歴史・文化の再発見と創造を考える仲間」を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさと自慢をしたいと考える方々の入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。

○会費は月額2,000円。(会報印刷等の諸経費)

入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井 啓治 0299-24-2063 打田 昇三 0299-22-4400

兼平 ちえこ 0299-26-7178 伊東 弓子 0299-26-1659

「ふるさと風の会」 <http://www.furusato-kaze.com/>

生ちようどスポーツ・メンタル・トレーニングの原稿を頼まれ書いていた時でもあったので、原稿執筆の良い検証取材となった。
我が国におけるスポーツ・メンタル・トレーニングの研究は、東京オリンピックに向けての強化訓練たけなわであった1960年頃からであるが、それから数えるとすでに50年が過ぎているのであるが、いまだにオリンピック候補・強化選手にすら根性と体罰がまかり通っているとは「見上げたまんだよ屋根家の禰」である。

日本のスポーツ科学の研究は非常に高い水準にあるのだが、トレーニングの現場では十分に活用されておらず、海外から逆輸入をしているような有様である。本当に屋根家の禪である。

教育の場にも体罰は必要などとの意見を言う馬鹿な奴がいるが、そもそも教育の場には罰などと言うものはあり得ないのである。勉強が出来なかったり、しなかつたりするのは罪を犯す事ではないのだから、そこに罰を科すこと自体が間違ったことなのである。

プロゴルファー志願の青年が重要な試合の度、リカバリーショットがうまくいかなかった、と言いつつ、矢張り緊張で無理をしちやうんですかね、と質問してきた。この時点でスポーツ作文力の指導者としては、やれやれである。競技スポーツを定義するとすれば、「反射的適正行動能力を競う」と言うことになろうか。適正行動力と言うのは、仮説設定能力と置き換えてもいい。

その青年にこんな質問をしてやった。ミスショットの結果は絶対になかったことにすることは出来ないのではないか？ と。きよとんとした顔をしていたので、ミスショットの結果を回復することが出来るのだつたらリカバリーショットという言い方があるだろう。しかし、結果が回復できないのにリカバリーなんて言うなよ。ゴルフはティーイングラウンド以外は、あるがままの状態からボールを打つ競技なんだから、深いラフに入れたから次はリカバリーショットだなんて馬鹿な事を考えるな。ナイスリカバリーなんて台詞は娯楽番組の解説者が視聴率を取るための話だ。お前は解説者ではないのだから、適正行動をする事だけ考えろ、

と話してやったのだった。

さらに、リカバリーショットって何だ。失敗してもその失敗がなくなるのか？ お前さんの言うリカバリーショットが上手くいくと一打打数が減るのか？ 失敗したショットがなくなるのだったらリカバリーと言っても良い。だが失敗した打数が減らないのなら、リカバリーと思うな。大体、お前さんは失敗失敗と言うが、失格になったわけではないのだから失敗ではないじゃないか。競技の中で失敗と言うのは、プレーが続行できなくなる、つまり失格になった時だけだ。

きよとんとしていたが、中学、高校、大学で根性根性、集中力で育ってしまうとプレーをするための作文、仮説設定を考える能力が養われていないのである。いろいろな話を聞かせ、何んとかツアープロ選手となったのであるが、ツアースタイルの取れるわけもなく、賞金レースに出る前に競技を止めたようである。

根性、体罰の中で育ってきた者は、所詮この程度にしかならないといえよう。根性主義は、才能を潰すことはあっても伸ばすことはないと言いつても良い。

体育系、文化芸術系にしろ、現役を退いて直ぐに、指導者としての勉強、資格等を得ないでも指導者になれるのは、日本だけではないのだろうか。個人的な弟子入りをするというのであれば、指導資格など問うものではないが、チームだとか、クラブだとか教室と言った場での指導者には、矢張り指導者としての教養・スキルを身に着けた者が当たって貰いたいものである。

真の『幸福』とは…

菅原茂美

このテーマは、多くの人々により、何度でも語り尽されたことだろう。

屠蘇に酔いながら、いただいた賀状を読むと、殆ど『ご多幸を祈る…』と結ばれている。そこでこの際、国民にとって本当の幸せとは何ぞや？ その価値観を、じっくり考え直してみたい。酔いがまわって、心棒がぐらつくど焦点がボケる恐れがあるので、まずは結論を先に述べておく。

「真の幸福」については、今更、奇を衒う（てらう）つもりも、特に示唆に富むわけでもない。ごく平凡で、ありふれた所に落ちつきそうだ。

即ち、目指した目標の大小にかかわらず、日頃の努力が結ばれ、納得できるような結果が得られた時。そして人を頼らず、迷惑をかけず、おのれに納得のいく自立ができた時…。そんな時、人は、やっとなが胸を、なでおろす事ができるのである。かろうか。それが「幸せ」というものであろう。

しかしどんな社会でも、自分一人では生きてはいけない。互いに助け合って、家族なり、組織なりを作り上げていくもの。その中で、己を成長させ、磨きあげ、より大きな夢を膨らましていく。生きがいとは、そこから生じてくるものなのであろう。あれもこれも他人を「あて」に、寄りかかって生きるのでは、あまりにも情けない。

【年頭から辛口で恐縮だが、近年、政府の社会保障の充実、ひ弱な人間を作り過ぎる。戦後の日本人は、頼れるものなど何もない。何としてでも生き抜こうとする強い「気迫」があった。自立心こそ幸福への道標と考える。】

人は社会保障の恩恵を受けたかったら、相応の

負担をしなければならない。暮れの総選挙では、消費増税反対・原発反対の政党は、大方、敗北を喫した。国民は責任ある投票をしたと言える。社会保障費は毎年1兆円ずつ増えている。国の借金は1千兆円近く、その利息だけで毎年10兆円だ。後先考えない理想論は、もはや通用しない。

電力は社会に元気をもたらす原動力と言え。それを生み出す原発は、これまで日本の3分の1を占めてきた。福島原発事故は、「想定外の自然災害」と、責任逃れの言葉が吐かれた。しかしあれは、安全対策費をケチった正に人災である。そんな状況下で起きた事故を、ただただ恐れ、やみくもに反対するのは筋違い。滋賀県知事は、隣の福井県の原発の恩恵をたつぷり受けていながら、真つ先に卒原発を唱え、合流した仲間共々、見事に惨敗した。事故から県民を守りたい気持ちには分かる。しかし知事なら、不況にあえぎ、産業が空洞化する現実を見極め、いかにして国民に再建意欲を持たせるか大局観を持って、総理並の見識を持たなければならぬ。日本全体の安定運営をまず念頭に置くべきであろう。(2012年は、原発停止、やむなく化石燃料多用のため、3兆円も余分の出費。日本は6兆円の貿易赤字に陥った。)

正月のテレビは、一部を除き、国民総白痴化の行進曲。世界が新エネルギーとして、シェールガスやメタンハイドレートに血相変えて飛びかかるうとしているのに、日本はエネルギー自給率4%を忘れ、ヒステリックに原発反対。消費増税反対。福祉はもつと増やせ！しかし金を出すのはいやだ。ならば、行き着くところは、一億総引き籠り列島。尻つぼみは明白。どうも私は酔っぱらうと口先が荒くなるようだ。

原発は、人知を結集し、能う限りの安全対策を講じ、火力発電の余計な出費と温暖化ガス排出を抑え、遠い未来は廃止に導くとも、今は過渡期。海外からの発注も多い事なので、しっかりした対策を講じ、産業発展の基幹となるべきである。

* * * * *

再び幸福論に戻るが、ほんのささやかな幸せでも、人により掛け替えない、これぞ至上の幸せとする人もいる。一方、他人から見たら、あんな羨ましい生活が本人にしてみれば、まだまだ不足もつとでつかい幸福があるはずと、欲を張る。金や物を最重要とする人もあれば、ささやかでも健康で家族円満が何よりの宝とする人もいるだろう。幸福観は、人により大きく異なる。

幸福論には、まず「健康」と、誰でも考えるが、健康でないなら不幸か？というのと、必ずしもそうとは言い切れない。

私自身、非常に悪性の前立腺癌にやられたが、発見が早かったため、すぐに手術をし、放射線をタツプリ浴びて今は全く元気。術後もうすぐ13年になるが、非常に元気で、古稀過ぎて、今でも週2〜3日、専門の仕事をバツチリこなしている。状況にもよるが、癌にかかったからと言って、必ずしも不幸とは限らない。私は癌で100日間の入院中、毎日、待合室で囲碁三昧。実に楽しい入院生活であった。こんな楽しい毎日なら、一生病院から出なくともよいとさえ感じた。

同じように17歳・高校2年の時、結核で1年休学・自宅療養。この時も、何しろ抗生物質のない。しかも戦後間もなくの食糧難の時代。安静が第一ということ、毎日自宅で読書三昧。あの時の読書習慣が今、本当に役立つと思っている。

病気ではあるが、決して不幸ではなかった。

そんな思い出に浸っている時、乙武洋匡氏のテレビインタビューを見た。氏は先天性の四肢切断という障害を持っている。現在、日本第3位の発行部数を誇る「五体満足」の著者である。氏は『障害は不便です。しかし不幸ではありません』とはつきり言っている。親の愛情に見守られ、自己肯定観もすっかりし、スポーツライター・小説家として活躍中。数人でバンドを作り、ボーカルも演じている。平凡な五体満足の人より、遙かに活発に活動している。社会から理解をいただき、活動の場を与えられていることに、心から感謝している。私は「幸せです」とはつきり言っている。

* * * * *

目を転じ、思い出したのは、古来、大乘仏教が根付くブータン国の「国民総幸福(=GNH)」という考え方である。ブータン前国王が提唱したものの。同国では、「国内総生産(=GDP)」の豊かさ、国民の幸福観とは決して相関ではない。健康で生きがいを持ち、人間関係が円満で、人の役に立った時に、自分は最も幸福だと感じるのだそう。要するに「幸せ」とは、お金じゃないよ！心の豊かさが大事だよ！という事らしい。

【大乘仏教とは、広辞苑によれば、紀元前後頃からインドに起った改革派の仏教である。それまでの仏教が、出家者中心で、自利中心であったのを「小乗仏教」として批判し、それに対し、自分を「菩薩」と呼び、利他中心の立場を取った。東アジアやチベットなどの北伝仏教(中国・朝鮮・日本など)は、いずれも大乘仏教の流れをくむ。】大乘仏教では、一日一善を積み、天国へいけると説いている。この話を聞き私は単細胞なので、

別に天国へ行きたいからではないが、何か一日に一つでも、人の役に立てたらいいなとすぐ思う。そこで、以前から実行してはいたが、車で通勤の途中、片道一車線の対面交通の路上、右折ウインカーを出して後ろに多数の車が連なっている場面などは、パッシングで合図をし、できるだけ、こちらが止まり、相手を右折させてやる事になっている。これは、相手に喜ばれるだけじゃなく、日頃私が唱えている地球温暖化ガスをできるだけ少なくする…という実利もある。相手もパッシングでお礼の挨拶をくれることもあり、こちらは、とてもすがすがしい気持ちになる。茨城は交通マナーが極めて悪いという定説のようだが、こんな、小さなことでも、皆が心がければ、汚名返上に、いささかなりとも役立つであろう。

真の幸福とは何か？病気だから：障害があるから…：と言って不幸のどん底とは限らない。心の持ちよう・向き合う姿勢で、そんなものは克服できる。誰が悪いのでもない。運命というか、巡り合わせというか、そんなことでもたまたま自分の所に、そんな不運が転がり込んで来たという事。そんならそれで仕様がなない。心広く受け入れてやれば、それほどの苦痛でもない。たまたま自分の住んでいる街に、巨大隕石が降ってきて、街ごと吹っ飛んだとすれば、誰を恨んでも仕様がなない話。そんな時はそれで諦めるほかあるまい。

ナイスプロポーションの、超美人に生まれたからと言って、必ずしも幸福の絶頂とは限らない。クレオパトラは、最後は自殺に追いやられ、楊貴妃は、安史の乱で家臣に殺された。少々オカチメンコで短足でも、心豊かで人にも慕われる観音様のような、お人もいる。

極度の貧困は、かなり苦痛である。働けるのに働かなくても、生活保護にタツプリ浸りつばなしの心貧しい人もおれば、保護費よりはるかに少ない賃金で働き、保護は受けず、世間に迷惑はかけたくないとする、高貴な心を持つ人もいる。政治はその辺の事情をしつかり掌握し、筋の通った行政を行うべきである。

結局、真の不幸とは、心貧しいことであろう。オレさえよければ良いとする自己中心主義。己の欲望を満たす為なら、他人の生命・財産をも奪う。ブータンの大乘仏教に裏打ちされた、利他主義の対極。こんなものは当然、閻魔様の逆鱗に触れ、地獄行きということになるであろう。それを防ぐのは特別の道徳教育とかではなく、平凡な家庭教育が基本であろう。親がしっかりと子供をしつければ、そんな悪道に走ることはあるまい。大方のことは家庭教育が基本である。それがイジメッコの親に注意すると「盗人猛々しい」というか、とんでもないモンスターに変身。猛烈に反撃してくる人もいるという。親がなっていないから、子供が乱れる。

【なお最近知ったことだが、ハワイのマウイ島では、ナイトレインボー（月虹・げっこう）が見られたら幸福になれる…という言い伝えがあるという。月虹は月の光が弱いため、明確な7色には見えず、白っぽく見えるので、「白虹」とも呼ばれ、先祖の霊が橋を渡り祝福に訪れるのだという。月虹は、東の方に小雨の降る夜明け前、満月が西に傾く頃、月周辺は晴天で、小雨の降る場所を照らすと「虹」が浮かび出るのだそうだ。月は楕円軌道で、最も地球に近付いた時の満月でなければ照度が足りず、虹は見えないらしい。数年に³⁰分ぐ

らしいが見られないという。その時の「月↓水滴↓観察者」との角度は $40 \sim 42$ 度に限定される。】

* * * * *

今の日本は不況で、犯罪は多く、ノロウイルスなどで多数の人が死ぬ。こんな不幸はない…と嘆かれる方もいるだろうが、とんでもない。こんな安全で衛生の整った国はめったにない。私は外国をわずか4か国しか見てないが、それでも、日本ほど安全な国はないと思っている。

まず、豊かな国も貧しい国も、国民は自衛のため、護身用の銃を持っている。危険極まりない。何かのすれ違いがあれば、ムザムザ命を落とすハメとなる。アメリカなどコンビニの数より銃の販売店の数が多いとも言われる。何の罪もない小学生が、頭の狂った犯罪者による乱射事件で多数死亡。政府は銃の規制に乗り出そうとすると、猛烈な反対。西部開拓時代から、自衛の銃は絶対手放せないのだという（裏を返せば、現代でも他人の生命・財産を狙う不逞の輩が、いくらでもいるという事）。日本は社会保障制度だって、かなり良くできている。医療保険制度など、なかなか他国では、こうはいかない。老後は南国で…などと日本を脱出する人も多いが、結局、医療関係不備のため、ほうほうの体で逃げ帰ってきているようだ。

私自身、中米のある国で、かなり万全の注意をしていたにもかかわらず、アメーバ赤痢に感染し、3日間で7kgも体重が減った経験がある。下痢と脱水が酷かった。幸い命は助かったが、その他、マラリアはじめ熱帯病は無数にある。カッコつけて国際協力（外務省の囑託・シニア専門家）などやったが、まさに命がけである。ある時、現地での街の居酒屋に入ったら、店の壁に弾痕がある。こ

これは何かと聞いたら、先日、店の客同士がケンカになり、撃ち合いをやったとの話。たまにはこんなこともあるのさ」と店主はケロリ。いまだに、西部劇時代さながらである。

私は獣医師として中米の現地農家を回る時、国際運転免許証は持っていたが、日本の4駆の車に、①現地の運転手を雇う②通訳を雇う③マシンガンを持ったガードマンを雇う：こういう形で仕事をしていた。熱帯のスコールでいくら道路を補修してもすぐ道は崩れる。ハイウェイでも、道路に大きな穴など開いている。すると、国道管理責任者は、『穴に落ちこちて死ぬ奴はバカ!』これで簡単に済まされる。

【日本は、あまりにも国民の面倒を見過ぎる。自分の命は自分で守れ!これがあたりまえ。池に子供が落ちた時、池の周りをバリケードなどで囲み、危険だから入るな!と立札を立てないから、管理者に責任がある:などという判決は、あまりにも国民を軟弱にしてしまう。行政経費もかさむ。日頃から危険な所には立ち入らないよう、親が教育をしっかりとしておくべきだ。ドイツでは、幼稚園生に鋭い刃物で、枝などを削らせている。危険な道具も正しい使い方を覚えなければ、立派な大人に成長できないからだという。日本は、我々戦中戦後を生き抜いた者は、あんな苦しみを子供には経験させたくないという親心が、却ってアダになり、子供を軟弱にさせてしまった。自立心のないニートだか何だか知らないが、石にかじりついても、己の道を貫こうとする強固な意志を持った人間など、化石人類みたいに見られる。あまりにも便利過ぎて、骨なし子供を作り上げてしまった。不都合なことは、すぐ他人のせいにしてしまうか

ら、自己判断できない軟弱者が世に溢れる。こんな無定見が、生活保護費受給者210万人の無茶苦茶な国を作り上げてしまった。裁判官は、国民に甘い判決を下さなければ、総選挙の時、名前にバツをつけられるから:勘ぐりすぎかな:】

さて話を中米に戻し、道路はズタズタなので、乗用車は尻もちをつく。ランクルかパジェロでなければ農村部は走れない。すると現地のギャングはその車欲しさに、襲撃してくる。ところがかの国では警察官は、年間10カ月分しか給料をもらえない。不足分はアルバイトをやれ:という仕組み。それゆえマシンガンを持った現役の警察官が私のガードマンという次第。現実一度、田舎道進行中、チンピラギャングに襲われたが、私のガードマンは強力で、簡単に追い払ってくれた。帰りにドライブインで夕飯を御馳走したら、いつでも命がけで守ってやるから、次も指名してくれと言われた。こんな途上国を経験しているので、日本の治安の良さは、比べ物にならないほど立派。不平等など云ってる場合ではない。

なお、こんな治安状況の国へ赴任するのだから、出発の時、多額の生命保険に強制加入させられた。掛け金は、一部自己負担で、大方は国が支払ってくれたが、どうやら無事生きて帰ってきたので、女房のヤツ、がっかりしたかな?

* * * * *

それにしても、近年の世界情勢は、どっちを向いても『オレさえ良ければそれでよい:』という傾向があまりにも強い。大乘仏教の寛容さなど、どこにも見られない。何が自由競争ですか?何がグローバリズムですか? 弱肉強食あるのみ。

特に私がカチンと来ているのは、地球温暖化防

止のための、排出規制国際会議で、先進国も発展途上国も、みんな責任逃れ。中国など、世界でも温室効果ガスを排出しながら、産業の停滞を防ぐため、自らはその責めを負わず、責任は全て先進国が持つ!と迫ってくる。最も、そんな低レベルの国と、ともに喧嘩しようとする方が愚か。(尖閣諸島など、こつちがムキになればなるほど、おもしろがって敵も絡んでくる。中国は都市戸籍人口4億人に、農村戸籍人口9億人だが、その農村人口が所得格差で食って行けない。それを何とかしろと言って、ハケグチを反日運動に持ってきている。いずれ内部崩壊で瓦解あるのみ。)

鳩山元総理は就任早々国際会議場で、日本は、1990年比で、2020年までに温暖化ガスを25%削減すると大見栄を切った。これは1970年と同じ値で、世界を感心させた。ところが途中経過の現在は、削減どころか大幅に増えている(原発停止で、化石燃料多用にもよる)。空手形で格好つける虚構は、国の信頼を根底から失う。かの御仁は、沖縄の基地問題を徹底的に混乱させるなど、スーダラ節を上回る無責任男の宇宙人であった。

地球温暖化は、両極の氷がとけ、海水面が上昇し、海抜の低い地帯が水没するだけではなく、生態系が変わり、多くの生物種が絶滅していく。歴史上海水面は100倍ぐらい、何度も上下している。そして中緯度地帯も熱帯化して、マラリアなど、熱帯病が中緯度地帯にも蔓延し、多くの人命が失われる。現在マラリアは、全世界で2億人が感染し、毎年200万人が死んでいる。熱帯にはその他恐るべき伝染病が多数ある。極端に言えば、地球温暖化は、人類の滅亡にもつながる。そうと分かっているながら、近視眼的に、今の今、オレさ

えなければ良い：主義で、資源を浪費し、環境を汚染し、子孫が安心して住めない環境作りに、世界各国が競争して突進している。人類は何のためにこんなにも大脳を膨らましたのか。人間の欲望なんて、どこまで浅ましいものなのか。経済成長の競争が国民を不幸にしている。

経済力はソコソコでも、国民が安心して、心豊かなブータンの国民の方が、ずっと幸福感に満ち満ちているように見える。

* * * * *

これまで私は、地球環境を壊さないためにこれ以上、多くの物づくりを止め、スローライフを取り入れなければ、資源は枯渇し、環境は汚染し、人類の滅亡につながると、何遍も述べてきた。経済成長至上主義は、決して人類を幸福には導かない。ひいては子孫の繁栄を、危うくさえするものだ。世界は、いい加減この辺で目を覚まし、人類も自然の一部であることを再認識し、慎ましやかに、自然の恵みに感謝しながら生きていくべきである。世界の歴史学者達は、かつて日本のアイヌの、自然を敬う生活態度に、心から尊敬の念を抱いているという。

浮世離れと言われるかもしれないが、せめて江戸後期、越後の良寛を見習いたい。五合庵に住まい、村童を友として脱俗生活を送る。良寛は禅僧の歌人だが、その号は「大愚」とは恐れ入りました。托鉢で得た僅かの米と、薪束に心から合掌。

この上ない幸せがあらうかと、大満足。皆が良寛のような心構えなら、世は平和になる。そうして暮らせれば、おいしいものを食べなくとも、高級車に乗らなくとも、何の不満もない。人類は滅亡をのがれたかったら、それくらいのスローライフ

を覚悟すべきだ。寸刻を争う経済競争は、国民を幸せには導かない。

最後に一言。関東平野に住む人は、雪が降らないというだけで、最高に幸せといえる。同じ税金を払っているのに、雪国の苦痛は計り知れない。私も雪国生まれだが、雪国の人々は「おしん」のように、あらゆる辛苦に耐え忍んで生きていることを、時には思い浮かべてほしい。

和紙の道

木村 進

水戸の北西方面の茨城県北西部から栃木県の山間部では昔から紙（和紙）作りが盛んでした。

これは那珂川上流の栃木県那須烏山市や馬頭町（現那珂川町）と、水郡線と並行して流れる久慈川沿いの常陸大宮市山方地方にかけての一带に広がっていました。

上質な和紙を作るには材料となる雁皮（がんび）、楮（こうぞ）、三桮（みつまた）などの木材と、豊かで清らかな水が必要になります。この条件にあった場所としてこの地帯が適していたためでもあります。山間部での貴重な産業の一つとして盛んに行われるようになったものと思われまます。またこの地方の和紙の特徴は楮（こうぞ）のみで作るため虫がつかず強靱な紙として重宝がられたのです。

今でも、烏山では上質な厚手の和紙である程村紙（ほどむらし）は各種版画・賞状用紙などとして使われています。また、山方地方は西ノ内和紙として水戸藩でも非常に重宝がられ、商家の大福帳や大日本史編纂の紙としても使われました。

この烏山、西ノ内和紙の他に、その中間地にあたる常陸大宮市小瀬（おせ・緒川（おがわ）から美和（みわ）地方にかけて上質な和紙の産地がありました。水戸光圀が城内の侍女たちを寒中に紙漉き見学に遣わし、紙の大切さを学ばせた場所だといわれ、この紙漉き場の跡に紙の資料館が建てられています。水戸藩にとっては西ノ内と並んで重要な紙の産地であり、この近くの出身であった家来の松之草村小八兵衛（下ラマ水戸黄門の風車の弥七のモデルになったといわれる人物）がこの紙漉き見学を進言したと伝えられています。

この美和から小瀬を通り常陸大宮を経由し常陸太田や水戸へとつながる国道293号線は紙流通の道であり「紙街道」とも呼ばれていました。戦国時代までは佐竹氏に、江戸時代になっては水戸徳川家に紙を供給していました。この国道は緒川・小瀬からそのまま北上して旧美和村の鷺子（さぎこ）という信号で馬頭の方に左折します。ここを左折せずに右に行くくと高部（たかべ）という昔、佐竹氏派の高部氏が支配していた部落があり、古い酒蔵や煙突が残る町があります。江戸時代にはここも紙を扱う業者がいて大変栄えた場所だといえます。

明治30年頃から全国に鉄道が敷かれましたが、この地方は鉄道の駅から離れた遠い場所になってしまいました。そのため、鉄道に流通の主役を奪われるとともに、洋紙に取って代わられた和紙産業は急速に萎んでしまいました。今では、ここが和紙の里であったことも知る人は少なくなってしまうのです。

上質な白い和紙のことをトリノコ紙（かみ）というそうです。名前の由来としては、文安元年（14

44年)成立の『下学集』に、「紙の色 鳥の卵の如し 故に鳥の子というなり」と説明があり、また『撮瓊集』では「卵紙」と書かれていることを根拠に一般には「鳥の卵の色のように少し黄色みのある白い色の紙」のことだと説明されています。しかし、漢字の「鳥の子」に対して「鷺子」とも書かれているものもあります。この美和には馬頭(現那珂川町)との県境の山の上に「鷺子山上神社(とりのこさんじょうじんじゃ)」という古い山門や千年杉のある大きな神社があります。神社の中央が茨城県と栃木県の県境となっており、社務所も両県にあります。今では大きなフクロウの像も造られ、ふくろうは不苦労ということを特徴として苦労を除いてくれる神社として信仰を集めています。

しかし、この神社の創建は大同2年(807)に馬頭出身の大蔵坊宝珠上人が諸国遍歴中に四国の阿波国(徳島県)に立ち寄り、製紙業が盛んであることを知り、紙漉きの技術と共に守護神である天日鷲命(あめのひわしのみこと)を勧請し、鷺子山に社殿を建立したのが始まりといわれています。

紙の歴史をたどると、エジプトで発明されたパピルスがもつとも古いとされていますが、現在のように植物繊維を水に溶いて漉く方式の紙は中国で約2000年前に発明されました。日本に入ってきたのは西暦610年頃に高句麗の僧、曇徴によって製紙法が伝達されたと伝えられています。

この今から1400年ほど前に日本にもたらされた紙漉きの技術が、四国阿波地方で広がり、それが1200年ほど前にこの地に伝わったことを示す神社とも考えられます。神社の祭神である天日鷲命(あめのひわしのみこと)は四国阿波地方の忌部氏の祖先といわれる神で、神話では天岩戸の前で

弦楽器を奏でていると、その弦の先に鷲が止まったため、この神を天日鷲命と名づけたとされています。

忌部氏は黒潮に乗って舟で千葉に渡り安房の国となり、関東地方に広がって多くの鷲神社、大鷲神社などが商売繁盛の神様として広がっています。大きな熊手を買って商売繁盛を願う酉の市(とりのいち)が有名です。鷲神社も「わしじんじゃ」であったり「とりじんじゃ」であったりします。そのことからこの地がかなり昔から和紙の里として栄えてきたことが想像されます。

しかし、この鷲子の隣は栃木県の馬頭町(現那珂川町)です。馬頭町は古くから砂金が採れたことで知られ、和紙の里那須烏山も含め、朝鮮半島から渡ってきた帰化人が住み着いた場所としても知られています。これはこの紙漉きの技術が阿波(徳島)から伝わったのではなく、高句麗などの朝鮮半島から直接もたらされたとも考えられます。

一方トリノコ用紙と辞書を引くと、愛媛県や香川県などでは主に「模造紙」のことを「トリノコ用紙」と呼んでいるそうです。またその他の地方でも模造紙とはいわずに、サイズから「B紙」、材料から「ガンピ」などと呼んでいる地域もあるそうです。

ではこの模造紙ですが、これは和紙ではなく洋紙で、日本の「トリノコ和紙」を模造して造ったので模造紙といわれているのです。この名前のいきさつは、日本政府が慶応3年(1867)のパリと明治6年(1873)のウィーン万博にこの手漉きのトリノコ和紙を出品して日本の優れた技術が世界に知られ、日本の技術に世界が大変驚いたのです。特に、ヨーロッパではこの紙に絵を描いた

り、壁紙とするのにとっても評判が良かったといえます。そしてオーストリアで、この「トリノコ和紙」を真似て洋紙が造られました。和紙を真似て作ったので模造紙と呼ばれたのです。そして今では、この模造紙が主流な紙(洋紙)となってしまうました。

ここ鷲子地方が「トリノコ紙」の名前の由来になったとの証拠はありません。逆にトリノコの名前が先にあつて、この地に伝わって地名になったのかもしれない。この鷲子・美和地区に「みわ道の駅」があり、「ふるさと館 北斗星」という名前をつけられています。夜に満天の星が綺麗にみられる場所として町おこしも行われています。

しかし、和紙の里の歴史も忘れないように、この変わった地名「鷲子(とりのこ)」とともに「鷲」和紙」とのつながりを考えてみるのも楽しそうです。

国分町の仁徳天皇さま

兼平ちえこ

毎年九月に行われます石岡のおまつりで華やかさを誇る山車に乗る人形についてお伝えしています。当会報第七十八号にて金丸町の弁財天さまから始まり第七十九号には香丸町の聖徳太子さまそして今回は国分町の仁徳天皇さまです。

香丸町通り(国道三五五線、通称笠間街道を笠間方面向か)を過ぎると間もなく笠間街道の両側に広がる国分町(現在の地名は府中三丁目から五丁目)に入ります。NTTの赤、白の電波塔が雄雄しく聳え、町内を見守っているかのようです。戸数は約六〇〇軒、

比較的大きい町内だそうです。

今回も国分町内に住む知人を通してNTTの塔を左に見る事が出来、笠間街道を前にしてお住まいの島田様をご紹介頂きました。島田様はおまつりには中心のご活躍なさっている方で大切に保管されておられる仁徳天皇さまとのご対面というご配慮もして頂きました。

昭和四年、国分町の年番の時でした。国分町と同じく山車人形の購入を予定されていた大小路町内の代表の方と国分町の代表の方で当時、東京都浅草区茅町（現在の住所は台東区柳橋二丁目）の江戸型山車職人『浪花屋』庄田七郎兵衛氏を尋ねましたところ丁度、仁徳天皇と桃太郎の二体が作製されてあったそうです。

さてどちらを選ぶかとなりましたが、国分町は、奈良時代に聖武天皇の詔で建立された国の特別史跡に指定された常陸国分僧寺の遺構が保存されている歴史ある町内として仁徳天皇さまになったそうです。

仁徳天皇は応神天皇の第四皇子で難波（大堰）に都したといわれている最初の天皇で租税を三年間免除したという伝承があります。

「高殿に登りてみれば 煙り立つ

民の竈は 賑わいにけり」

の御歌から、民の生活を常に心配し見守る時の様子が人形のモデルになっているそうです。

この御歌はおまつりの衣装である鯉口シャツや股引、雪駄の鼻緒そして手ぬぐいに菊花紋や仁徳天皇さまの印のしるしとともに描かれてあり、町内みなさんの仁徳天皇さまを崇めるところが深く伝わってきました。

その中の御歌入りの手ぬぐいは再販するとのこと

と、おしゃってましたが町内外の人でも購入できる事を希望しています。

また山車の前でお囃子とともに女子会の皆さんが扇子や提灯を持つての「おしゃい」の掛け声に、仁徳天皇さまを讃える掛け声もありました。

高殿に登った仁徳天皇

山車の上から守ってる

民のカマドがにぎやかで

五穀豊穰喜んだ

山車の上から守ってる

今年もおまつりを守ってる

これは女子会の皆さんの熱心な練習で手話で行っているそうです。今年のおまつりのみどころの一つで楽しみにしています。

こうして三日間の任務を終えられた仁徳天皇さまは空調の完備された建物で休養に入ります。

狩衣、袴など衣装類は桐のタンスへ、竹製の本体から外された義眼の入ったお顔、民の生活を見守る為にかざした手、ヤクというウシ科の珍しい動物の毛から作られた髭、烏帽子等々は長持ちへ、取り扱う人は手袋をつけ、大切に大切に納められてありました。髭をはずされたせいでしょうか、仁徳天皇さまの笑みを浮かべた安堵のご様子が感じられました。

最後になりましたが、おまつりの時の山車に掲げられる「国分町」の扁額に注目です。總社宮に祀られている御神霊をお迎えするときの神幸祭とお戻りになる時の還幸祭の折、御神霊が国分町の山車の前を通り過ぎるまで「国分町」の扁額は金文字の「敬 神」の額に替えられ、お迎えし、お見送りすることでした。

仁徳天皇さまと共に国分町の皆さんの御神霊に

たいしての尊敬の念の姿勢に感激いたしました。島田様にはお忙しい中お電話頂いたり、詳しくご説明頂き誠に有難うございました。

・孫二人 追いつけず追いつけず初登山 ちえこ

ギター文化館 2013 CONCERT SERIES

2月24日 ティボー・コーヴァン ギターリサイタル

3月24日 長野文憲 ギターリサイタル

ギター文化館開設20周年記念コンサート

3月30日 Aプログラム 鈴木大介 大萩康司

Bプログラム 荘村清志 福田進一

3月31日 ビッグ4の饗宴

荘村清志 福田進一 鈴木大介 大萩康司

4月8日 里山と風の音コンサート

4月28日 大崎芳 ギターリサイタル

ギター文化館 〒315-0124 茨城県石岡市柴間431-35

Tel0299-46-2457 Fax0299-46-2628

二人で和菓子を食べながらお喋りをしていた。濃いめのお茶とほんのり甘みを舌に残す和菓子は、夫との穏やかな時間をより深めてくれていた。あれは十二月中半まだ夫が元気な時だった。和菓子の名は「木守」という。葉を落とし実も落ちて一つだけ残った柿が今年の木疲れを取って来年豊かに実る事を願っている実、それを「木守の柿」と言うと言い店主が話してくれた。

夫との話題はあちこちで見た柿の様子が中心だった。上高崎は台に一ヶ所だけ手入れされた柿畑がバラ線で見えてある。下高崎は東地区の傾斜地、台の谷津田に二三年前迄豊かに実っていたが、こここのところ木は切られ、根迄も掘られている。後々継続していく状況なのだろう。台で直売所を開いている夫婦の頑張りには頭が下がる。店が開くのが楽しみだった。さぞこの陰では苦勞の多い二人だろう。下玉里は柿畑が多いし、一畑一畑が確り作られている。玉川農協時代の農業政策が根づいたものだろう。放置されている処もあるが「柿の木団地」と名付け若い世代を受け入れる転換をした土地もある。川中子には畑地そのものが少ないが、二ヶ所三ヶ所の柿畑は順調だった。田木谷は山間に狭い畑しかない。纏まった柿畑等ない。畑に二本ある程度だ。栗又四ヶには全くない。梨の多い所だ。上玉里は下玉里地区に勝るとも劣らぬ件数、面積がある。全地域で緩い傾斜地に見事に秋を彩っていた。昔から豊かな六畑の二か所（大日久保、地藏久保）の畑の柿は、人の手が入らず、枝一つ一つが鈴生りになった実の重さで地についている。人は訪れる事もないのだろう。通

りかかった私の頭上を、鳥達が群がって飛び去っていく。村内の状況と合った人、その時の様子を話して聞かせた。夫は「先々代住職のもつてきた柿が村中に広がったんだな」とあった事もない曾祖父に二人で思いを焼らしていた。

そんな時、八郷の献上柿の事がテレビで話題になっていた。何度も耳にする中に玉里の柿が愛おしくなってきた。八郷の富有柿も玉里の富有柿も一緒なのだ。何で献上柿ともて囃されるのか。（土地の人が育てた努力も分かるが…）と僻みっぽい気持ちになる。大体は玉里だと自慢したい思いになつてくる。「玉里の富有柿は爺ちゃんが太垣から持ってきて増やしたんだよ」と父から聞いていた。秋の農産物の品評会に入賞した時、「お爺ちゃんの育てた柿は立派ね」と母が言っていた事を思い出す。村史にも「戸田見亮和尚」の名と富有柿の事が記されている。玉里音頭の中に玉里を特徴づけた一節がある。（蓮に柿、玉里良いとこね…）と出てくる。滝平二郎さんの切り絵の中にも柿の木と季節、柿の実と人物が描かれている。玉里の柿は人々の生活に根づいて百年以上にもなる事を改めて思う。平山の山口さんは玉里の柿の歴史を知っている数少ないお一人だ。柿栽培を始めた頃、柿に纏わる凡ゆる勉強をしたそうだ。土地・地質・肥・手入れは勿論、柿の歴史（明治頃迄は渋柿しかなかった事、渋柿に係った高橋さんの事、照光寺住職が地元、大垣から富有柿をもってきて玉里に広めた事）を語ってくれた。当時、農業経営者になろうとする人達は学習したという。それも皆で学び合った力は、後あとと生きている姿勢の大本になったと聞き感動した。中山のお婆ちゃんが「嫁に来た時舅さんから聞いた」と言う話をしてくれたのは、この柿の木は先代住職

と大垣に研修に行った時、戴いた柿の木だから、大切にしてくれ」と庭の真中にある木の話をしてきてくれた八十年大事にして来たが、先日切られてしまったと嘆いていた。乗り入れする車にとつて庭の真中の柿は邪魔な訳だ。淋しい事だが時代かな。でもそこに会話が欲しいと思う。当時の総代さん、世話人さんを連れて大垣の農家へ研修に行った事は父からも聞いている。今大きく栽培している方の中には当時の気持ちを脈々と受け継いでいるお宅が何軒かあるのも歴史を感じる。

寺には玉里の柿の名残の木が一本ある。終戦後の開墾や園舎、客殿、本堂と開築の度に、変つていく様子をその柿はずっと見守っている。私の幼い日から二十年位の生活の中にあつた柿の木は若葉や花の咲いた姿や青柿のなつた記憶より、赤い実が残り少なくなった頃、寒風に枝が揺れる姿が多い。大垣の右に背の高い木が十数本あつた。今は寺前住宅の一部になっている。西光院跡近くの畑にも二ヶ所三本背の低い木があつて取つて食べるには手ごろだった。遠く西に良善山の見える畑（竹藪の出口）には伯母とよく草とりに行った。手伝いも半端に木登りしていた私、伯母に「柿の木は折れやすいから」と何度言われても言うことをきかなかつた。その畑も人手に渡つて竹が伸び放題だ。北側の井戸の下には一本背の高い木があつて、小川の人が家族で来て耕していた。父の友達だつたようだ。今は土が盛られ、園舎の一部になつている。藪沿いに古い道があつたが、道沿いに五ヶ本あつた木。枝ぶりは低く幹は太めでよく実がついていた。品評会に出した柿もこの中の木になつた物だ。その木に鶏が首をちょんぎられ、吊るされていた事があつた。血を出していたのだ。

その木の事は姉妹で気味悪がっていたのを思い出す。今は庫裏の一部が建っている。雷電山の石段近くから南にある大門近く迄、畑があつて柿の色づいた葉が地面を覆っていた。その間からサフランがあわい紫色の顔を出していた。木があつたのは覚えていない。戦時中は防空壕を造りご本尊や過去帳仏具を移して置いた所だそう。今は鐘突き堂や庭木がある。唯一残っている一本は庫裏の西側にあつて、お手洗いの窓からよく見えた。冬の美しい月が枝にかかっていたのが印象的だった。今は客殿の南側になり、歴代上人のお墓を西にして、建設中の本堂の背後から見守つてくれている。今迄になく今年には周囲に沢山芽を出した柿。きつと子孫を増やしたいという思いだろう。その小さな一本を我が家にも貰つて来た。大きく育つて欲しいと願っている。

柿にとって何がいいのか。最初に道を開いた人が、その土地の人達と一緒に発展していく。あちこちに広がつてよい実をつけていく事がある。柿自身にとつても、柿自身にとつても喜びである。私の気持ちの小さかつた事呆れたものだ。

一人になつた今、冷えた残り柿の一つを食べている。暖かい部屋で老婆ちゃんが食べていた恰好で、婆さんになつた私が遠い日を忍んでいる。あの頃小さい電灯の下で板戸と障子の中、暖房は炬燵一つ（炭火の行火）それでも寒くなかつた。「婆ちゃん暖かい炬燵の中で冷たい熱み柿を食べるのが好きな」と言っていた。そして二人で食べた、あの日とても美味しかった。一人ぼつちじゃなかつた子供の日の事だ。今一人で食べている柿は味もない。

一カ月前、夫と食べた「木守」の柿は美味かつ

た。あの時はこんな日が来るとは思いもせず一口楽しみながら食べていた事が思い出される。

あの日の和菓子柿「木守」は今口になっている冷えた柿の大きさを違うが色合い、形がそっくりだ。物を作る事は、その土地の歴史から生まれ、大地から育つていくものなんだと柿を育てて来た農業者や和菓子職人へ思いを寄せている。

冬の一夜が更けていく中に私はいた。

【特別企画】

虚構と真実の谷間

第四章 霧の中の栄光（4・3）

打田昇三

一揆の首領に担ぎ出された和賀主馬亮忠親の素状に今一つハッキリしないところはあるが、累代に亘つて和賀地方に「清和源氏の末裔」を、それも「源頼朝の子孫」を称していたことから、没落後も密かに伊達政宗の庇護を受けていたことが推定される。もし仮に、徳川家康が関ヶ原合戦で敗北したならば、伊達政宗は東北地方の武士団を結集し、源頼朝の子孫を担ぎ出し、藤原氏出身の自分が介添え役となつて日本に号令をする。何処の馬の骨かも分からない織田信長、豊臣秀吉、徳川家康が天下を取るよりも、そのほうが余程、筋が通る。快男児又は怪男児の伊達政宗は、そのぐらいのことを考えていた。

ところが、極めて悪運の強い徳川家康は風邪一つひかず、関が原で勝ち、天下をほぼ手中にした。政宗にしてみれば大口加入した保険会社が倒産し

たようなものである。それでも時の過ぎるのを待たば匿つていた和賀主馬亮忠親以下を自分の家臣として扱い事実上で源氏を越えることが出来る。

しかし世の中は上手いかないもので、南部利直が伊達政宗の怪しい行動を徳川家康に報告してしまつた。関ヶ原に出陣はしなかつたが、東北地方の護りに重要な役目を果たしていた南部氏が勤務評定で「禄高据え置き」にされた。原因は「家康死亡」のデマに惑わされて一部の兵が戦列を離れてしまつたことにある。そのマイナスを何とか取り返したい。自分の領土で起きた騒動に政宗が深く関与していることに確信を得た利直は「伊達の反乱計画」を切り札に使つたのである。

これが豊臣秀吉であれば「言い訳無用」で領地を没収するのであるが、伊達政宗という人物を知り抜いていた家康は驚かない。反乱が家康自身に向けられたものでは無く、言わば秀吉時代の圧政の後遺症であるから処分は別として取り敢えず当事者の言い分を聞いて事件の本質を探ろうとしたらしい。その辺りには反乱事件に対する家康の対応意図が読める。しかしこの場合は当事者と言うのが反乱の首謀者であるから、政宗に関与が無ければ其処には居ない人物なのである。それにも関わらず家康は「和賀忠親を伴い出頭するように」伊達政宗に命じたのである。さすが古狸である。

これには強気の伊達政宗も慌てた。反乱の首領である和賀忠親を連れて行けば「源氏だ！」などと言つても田舎者のことであるから何をしゃべるか分からず、また反乱者が同居していたことがバレたのでは家康に顔向けができない。絶対に隠して置きたい秘密であり「関が原合戦で家康が負けた場合の対策」などは最重要国家機密である。

何としても和賀忠親の江戸行きを阻止したい政宗は、先ず忠親に徳川家康から召喚状が来たことを告げ「江戸へ行く」と言つて共に岩出山城から南下して来た。その頃は未だ青葉城が新築工事中であつたから、それを見るとき口実で仙台に寄り陸奥国分尼寺で休憩をとらせた。そこに政宗からの特命を受けていた家臣が顔色を変えながら飛び込んで来て「江戸の家康公から火急の知らせが届きました！」と息を弾ませて報告する。

「何事ぞ！」芝居気たつぷりに書状を開いた政宗は、愕然とした様子で傍らの忠親を見てから、「実は忠親殿、貴殿の悲願である」和賀家再興が駄目になり申した！と声を落とした。さらに、「そればかりでなく、この政宗にもキツイお咎めがあるようで、江戸に来るに及ばず、岩出山にて謹慎せよ！との家康公のお言葉でござる…そうなる」と、これ以上、貴殿を庇うのは無理かも…と投げ捨てるように言った。豊臣秀吉、徳川家康という大物を相手に芝居をして乱世を生き抜いてきた政宗であるから、その演技は素晴らしい。

一流劇場に行かなくても、素晴らしい芝居を見せられた和賀忠親は感動して「すべての終り」を覚悟した。秀吉時代であれば落城と同時に首を斬られていた筈が、短期間ではあるが生き延びて和賀氏再興の夢も見させて貰った。忠親は政宗の手を取り「無念なれど致し方なし、某(それがし)は此の場に於いて切腹致す。只、和賀の家名が絶えることが心残りに存ずる…」と言つた。政宗は待つてましたとばかり「和賀殿の御心中は御察し申し上げる。家名のごことは御心配に及ばず、御息を伊達藩の家臣として迎える所存にござる…」と力強く宣言した。先に述べた小野寺盛衰記では

政宗が手紙で切腹を勧め、忠親が快諾して切腹したとなつてはいるが、激しい苦痛を伴う切腹を喜んでする奴はいない。忠臣蔵の四十七士も、心の中では再就職を期待していたのであろう。

それはともかく「善は急げ」…こういう諺が合うかどうか疑問はあるが、陸奥国分尼寺の一角には忠臣蔵の舞台のような切腹の場が設けられた。和賀忠親に従つていた七名の武士も死出の旅に随行を申し出て殉死している。忠親主従は関ヶ原合戦の翌年、慶長六年(一六〇一)五月二十四日に無念の切腹を遂げ、その墓は現在も残されているが言うなれば裏の歴史であるから、一般には知られていない。遺児は伊達藩に千二百石の武士として抱えられたと伝えられる。なお一説では忠親と共に殉死した家臣の数が十余人とされているが残された墓石は八基であり、忠親のものが大きくて、その左右に斎藤十蔵、溝田宗規、獨澤(ひとりざわ)修理、八重樫源三、煤孫(すすまご)上野、小原藤五、筒井喜助の石塔が現存している。

和賀忠親の口を封じた伊達政宗は反乱軍の支援は白石宗直の独断ということにして宮城県北に転勤させ、これで一件落着きということにした。徳川家康も百%事情は承知していたと思うが、政宗の責任には目をつぶつたようでも何とも言わなかった。新田系を自称していた徳川家康は同じ源氏の一門であり、和賀氏を庇護する気持ちもあつたかと思われる。むしろ最初から伊達政宗が「上申書」を出して真実を告白していれば事態は変わつていかも知れない。問題が有耶無耶になつたことはメダシメダシであるけれども、この出来事によつて徳川家康から伊達政宗に与えられていた百万石の御墨付きが只のメモ用紙になつてしまった。

大概の者はこれで諦めるのだが、さすがに伊達政宗はこのメモ紙を大事に保管して、家康が死んだ後に二代の秀忠、三代の家光と、将軍が変わるたびに「お約束を…」と請求していたと言われる。二人の將軍は「知らん！」と無視したらしいが、四代の家綱が小学生で將軍になつた際にも同じような要求をして老中職などを困らせた。すると重臣の井伊直孝が「難しいけれども、私が何とかしてみましよう。それには御墨付きの鑑定が必要なので…」と言つて伊達の屋敷に来た。

座敷に通され問題のメモを見せられた直孝は、じっくりと読み終わつてから、それをいきなり破いてしまった。怒りまくる政宗に直孝は言つた。

「…今は時代が変わり、日本中に空いた領地など少しも御座らぬ。貴殿のお気持ちも分かるが何時までもこれを請求なさることは仙台藩の御為にはならぬと存ずる。もし家康公がお約束を守られる御所存であつたならば百万が二百万でも、その場で貴殿を西の方に移して領地を賜つたことで有りましょう…聞けば仙台領内では実収入高が二百万石になるそうで、此処から他所へ移されることは伊達氏にとつて為にならぬ筈、依つて此の御墨付きを捨てました…」

言われた政宗は慥然としていたが、暫くしてから「破いてしまわれた以上は仕方が無い…」と諦めたそうである。和賀氏の滅亡に絡んだ伊達氏の駆け引きとも言えるこの一件は、岩手県と宮城県のごく限られた一部の地域で起こつたことであるから記録も少なく一般には伊達政宗が和賀忠親を扇動して反乱を起こさせたけれども、実現が難しくなつたので忠親を謀殺したとする説が多いようである。頼山陽の日本外史にも「…伊達政宗、

大捷の威を藉(か)りて数(しばしば)上杉氏を
侵し、密命に違(たが)う。又、南部の叛臣・和
賀忠親を誘(いざな)いて乱を為さしむ。事為(な)
らざるに及びて、忠親を殺して口を滅す」とあ
るが、和賀氏は南部の家臣では無いし、また仙台
市が立てた案内も「自分で切腹」のようになって
いるから結果的には死なせたとしても政宗が斬ら
せた訳ではない。戦国大名の苦勞が偲ばれる。

こうして鎌倉時代の初期から、真偽のほどは怪
しいながら「千鶴丸の後裔」源頼朝の子孫「説を
後生大事にして名家を称し続けてきた「和賀氏」
が断絶した。しかし忠親に対して政宗が約束した
ように子孫は仙台藩に残り、その他にも松岡(北
茨城)、最上、新庄、南部などの諸藩に和賀を称し
た人物が居たらしいから獺(かわうそ)や狼のよ
うに絶滅した訳ではない。既に述べたように奥羽
山脈を越えて出羽・仙北に進出した分流の本堂氏
が豊臣秀吉の厳しい追及を逃れて生き残り、徳川
家康に服従して旗本の列に加えて貰い、明治維新
まで家名を存続させている。慶長四年には豊臣秀
吉に振り回されて苦勞をした本堂忠親が引退をし
て高校在学中と思われる茂親が跡目を相続した。
それが和賀氏で後継者が絶えた時期と重なり然も
同名であるから反乱を起こした忠親と同一視され
るが家康との関係から見ても全くの別人である。
本堂茂親は関ヶ原合戦の始まる前に徳川家康が
使わした津金修理亮、中川市右衛門から「上杉景
勝の動きを抑えるため最上勢に加わるよう」命じ
られて出陣の準備をしていた。そこへ家康からの
第二の使者・田中清六が来て「最上勢に呼応する
よう本国(本堂城)にて待機せよ」と命じられた。
近隣の横手城に居た小野寺氏が西軍に属する気配

があつたのでそれを牽制するためであろう。佐竹
支配の後に府中(石岡)領主となつた六郷氏と共
に本堂茂親は小野寺領内に出陣している。

関ヶ原合戦の翌年正月には江戸に行き、そこで
徳川秀忠に御挨拶をした。秀忠の上には大御所の
家康が伏見城に居たから、其処まで足を延ばして
いる。家康からは留まつて伏見城の警護をするよ
うに言われて三か月ほど家康の身近に勤務した。
正式には徳川家康が征夷大將軍に任命されたのが
慶長八年二月であるから、何だか知らないけれど
も偉い人の言うことを聞いたわけである。家康は
遙々と秋田からやつて来た「自称・源氏の末裔・
和賀の分流」と名乗る若者の真面目さが気に入り
あれこれと雪国・秋田の話聞き出した。

其れにヒントを得た訳では無いと思うが翌年の
慶長七年五月には水戸の佐竹義宣に対して滅封の
上で秋田へ移るよう突然の命令を出している。
ここで脇道に逸れるようだが、話の関わりで和賀
(本堂)のことは少し措いて、豊臣秀吉の威光を

笠に常陸国で好き勝手をした報いと思われる急激
な地位の失墜により秋田へ左遷された佐竹義宣先
生を紹介しておく。全盛期には諸国高領所得大名
のベストテンに入る五十四万石余を領していた源
氏系の名族であつたが、家賃を溜めて追い出され
た店子(たなこ)のようにして水戸城を離れた。
その行く先は、最上領だつた雄勝郡(由利領と交
換した区域)、改易された小野寺氏領(平鹿郡)、
石岡へ来た六郷氏、志筑へ来た本堂氏、手綱(松
岡)高萩へ来た戸沢氏の三氏が領していた仙北
郡である。つまり出羽国に割拠していた中小豪族
の領地を掻き集めて佐竹を移したらしく、秋田行
きの命令には現地の石高(こくだか)が示されて

いなかったと言われる。その石高は常陸国を独占
していた頃の半分にも満たないが、潰されるより
はマシなので佐竹義重・義宣父子は“顔で笑つて
心で泣いて”雪国へと移つて行つたのである。

石岡(府中)は鎌倉時代から大掾氏を継承した
馬場氏が君臨していた土地であり、その家臣であ
つた家が多いようである。天正十八年には佐竹が
攻め込んで大掾氏を滅ぼし、町を焼き尽くした。
その後十年ほど佐竹が居て御機嫌取りに寺を建
てたりした。歴史的には短期間でも佐竹統治時代
があつたのだが、市民感情には大掾氏しか無いよ
うに思える。因果応報の点から言えば勝手放題を
した佐竹が滅封で常陸国を追われたのは罰が当た
つたことになる。それでも「盗人にも三分の理」
の諺を思い出した忠臣？がいて「国替え反対」の
武装決起大会を計画したらしい。佐竹軍の将とし
て石岡に攻め込んだ車丹波守猛虎(くるまたんば
のかみたけとら)がその人物である。

「藩翰譜」には群馬丹波守としてあるが、これ
は単なる聞き違いであろう。その丹波守が「わが
佐竹の家中には四、五万の軍勢と十年分の糧食が
あるのだから、徳川の命令に従つて東北地方に行
くことは無い―水戸を守つて戦いましよう」と
景気良く主張をした。佐竹には第十四代・義治の
五男で「東殿」と呼ばれた政義という思慮深い人
物が顧問のような立場で居たのだが、既に他界し
ていたから元氣印を抑える者が居ない。当主の佐
竹義宣が諦めるように諭し「今の天下は全てが徳
川殿に靡(なび)いており、日本六十余州で従わ
ぬ者は一人も居ない。我が佐竹勢だけをもつて天
下の敵になることなど、叶(か)う訳が無い」と言つた。
常陸国内では佐竹に謀殺された行方地方の旧・大

椽同族で三十三館と呼ばれた武将たちの遺臣が佐竹の没落を知って主家の仇を討とうと一斉に蜂起する動きも有ったので、義宣は無条件で左遷の命令を呑むと、第二次大戦中の学童疎開のよう慌ただしく秋田へと去っていった。しかし、その頃に「徳川家康が死んだ」という噂もあつたので、名前に「猛虎」が付いた車丹波守は承服せず同志三百人を集めて徳川の家臣に抑えられた水戸城を奪還する為の襲撃計画を立てたらしい。

この事件を伝える史料は少なく、その内容もそれぞれに違っているから真実は闇の中である。進軍ラッパ勇ましく水戸城に突撃して敗れたのか、計画の段階で情報が漏れて逮捕されたか、襲撃の日に大雨で那珂川が氾濫して未遂に終わったか、いずれにしても新聞の一面記事にはならなかったようである。それでも権力への反抗であるから首謀者は水戸から佐竹の影を消す目的で当事者により処刑された。事件の内容は闇でも処刑は確実に行われたが、生きていた徳川家康は車猛虎の武勇を惜しんで関係者を厳しく叱つたらしい。

これだけでは騒いだ割に話が単調過ぎるので、この事件に絡んで巷間に伝わる怪しい裏話を紹介して置く。これが真実か虚構かは調べ様が無いが深入りしない方が良く？話題である…首謀者として処刑された車丹波守猛虎の弟に車善七という者が居た。一説では丹波守の名が忠次で、善七の名が猛虎になっているが、どちらが正しいかは走り去った車のナンバーと同じで分からない。ここでは「善七」だけにして置く。厳しい犯人追及の目を逃れ、江戸に潜伏していたが上手く江戸城内の雑役夫に採用して貰った。庭の掃除や草刈などが仕事であるから將軍・秀忠の姿を近くに見ること

もある。何とかして暗殺しようと狙っていた。

襲撃の機会は有ったのだが流石に將軍の威厳に打たれて刺すことが出来なかった（この辺りが話として嘘っぽい）何度か失敗をして、結局は怪しい奴として將軍の前に引き据えられた。尋問に対して憶すること無く水戸城でのこと、主君である佐竹氏転封の不満などを述べ、更に將軍を討てなかつたのは自分の負けであるから、速やかに首を刎ねて欲しいと申し立てた。秀忠は、その勇氣に感じて幕臣として仕えるように言った。

しかし善七は「例え恩赦を受けても、有難くは思うが、自分の初志を曲げることは出来ないから採用は止めて頂きたい」と申し述べた。事実上の処刑催促である。これに対して將軍・秀忠は益々感服して「汝は誠の武士である。しかし、下僕と言えども自分に任せて居たものを殺すには忍びないゆえ解き放つ。身の振り方をどうするか、自分で決めよ」と申し渡した。是を聞いて善七は涙を流し「恨みを隠して將軍に仕え、其の主を殺害しようとした罪深い私が死罪を許されるのであれば、今後は乞丐（きつがい）最下級の民・賤民）の長として社会の底辺を支えていきたい」と申し出た。これを秀忠は快く許し、車善七は浅草に住んで江戸の非人頭となった。

これは江戸時代のことであるから人権問題にはしないで貰いたいのだが、江戸幕府は諸官庁の雑役で特に人の嫌がる仕事、例えば犯罪人の引き回し、死罪の執行に伴う雑役、道路掃除、行路病者保護施設の雑役などに従事する者を「穢多（えた）・非人」と呼び賤民として差別した。穢多は先天的な賤民、非人は先天的賤民の他に罪を犯したり、心中未遂の者や、車善七のように本人が希望

した者が含まれるという。戦国時代の後であるから応募（？）してくる者も没落大名やその関係者など武家統治社会から締め出された者が多かったよう、むしろ家柄が一般人より良かった。

そういう癖のある集団の長に善七は補されたのである。関ヶ原合戦―佐竹氏左遷―反抗運動―將軍暗殺未遂―江戸の賤民：歴史は奇妙に繋がる。豊臣秀吉には早くから服従を示し常陸国で大儲けをした佐竹氏も、関ヶ原の合戦に際しては永世中立国のスイス連邦を真似て徳川家康にも石田三成にも義理立てをした。スイスは軍人の大部分がパトタイムードと言われるから、専従の武将を抱えた大名が中立は有り得ない。家康には「憎むべき所業」とまで言われて大減封を喰らい、秋田へ行かされたのであるが、「水戸市史」はもう一段踏み込んで、豊臣秀吉が滅ぼした小田原の北条氏と家康とは姻戚関係にあり、佐竹は北条氏と常に對抗していたから関東を拠点とする家康にとつて目ざわりであった、と分析している。つまり所詮は常陸国（水戸）には居られなかつた…滅ぼされた大掾氏が、あの世で「ざまあみろ！」と言っているかどうかは知らない。

工房オカリナアートJOY 母なる大地の音を自分の手で 紡ぎ出してみませんか。

あなたの家の庭の土で…、また大好きな雑木林に一滴みの土を分けてもらい、自分の風の声を「ふるさとの風景」に唄ってみませんか。オカリナの製作・オカリナ演奏に興味をお持ちの方、連絡をお待ちしています。

野口喜広 行方市浜2465
Tel 0299-55-4411

領地の変更が良かったか悪かったかは、その大小名の運不運に依るところが大きいと思うが単純に考えれば誰でも父祖累代の地には未練が有る。佐竹の移動に依って出羽国から関東へ移された六郷氏、戸沢氏らの武将たちも、徳川家康の命令であるから「仕方が無い」と思ってたのであり、来て見てから「常陸国は良い所だ」と感じたのであろう。その中で清和源氏系和賀の系統を自負する本堂氏は、禄高が一万石に満たない志筑（かすみがうら市東部）に配置されたけれども、最初から常陸国が気に入って、と言うよりも志筑領が欲しくて、現代ならば有力政治家や関係官庁の役人などに働きかけて強引に入り込んで来た疑いがある。領地は八千五百石、出羽在国中と同じ石高であるから、都合の良い話にはなるのだが…。

豊臣秀吉に従った本堂忠親が時代の変化を見極めて引退し、息子の本堂茂親少年は徳川家康に好印象を以て迎えられた。祖先を源氏とする共通項もあって、国替えに際し本堂氏に与えられる予定の領地は本堂氏が最盛期に領有していた二万石以上の場所と言うことに内定していた。その場所は古代には常陸国であった磐城・菊多郡内である。夏井川溪谷下流域の、景観の良い所であるが江戸からは少し遠く平野部も少ない。豊臣秀吉が命じた小田原参集で父親たちが苦労したのを見ている茂親は関東平野に憧れていた。やはり大事の際に將軍の許に直ぐ駆け付けられることが出来なければ、武士は出世が難しい。何とか江戸の近くに領地を貰いたいと思っていたところ、佐竹氏の秋田行きで太平洋側に移れる可能性が出てきた。出羽国に共存してきた六郷氏などは石岡を手に入れた。

生き残るのが命懸けであった戦国時代を思えば

領地に不満を言うべきでは無いのだが、本堂茂親少年は「清和源氏の末流」という古い看板を背負っているから、伊達政宗を真似て景気の悪い不動産屋のように「良い物件」の掘り出しに拘った。豊臣秀吉や徳川家康に召集されて何度か西へ向かう道中で「此処は良い場所だ。この様な領地を持ちたい…」と思っていた場所がある。それが筑波山、霞が浦、その間を流れる恋瀬川と景勝三点セットに加えて古代伝説の残る龍神山の背景画がサービスになる由緒の有りそうな地域である。気候温暖で山有り、川有り、湖（古代の内海）有り、縄文時代の豊かな暮らしを想像出来る其の地域には確かに由緒はあった。しかし、外見では平和の象徴のような此の地域は、日本の歴史の怪しい部分に深く関わっていたのである。本堂茂親は、それを知らずにこの土地に一目惚れした。

石岡を「桓武平氏發祥の地」とする意見も有るらしいが、固いことを言うと桓武平氏には高棟（たかむね）流と高望（たかもち）流があり、高棟流は早くから桓武平氏として都の官僚に定着していたけれども高望流は忘れられていた。それを宇多天皇が就職幹旋のような形で高望王こと平高望を常陸国の高級官僚にしてくれた。常陸国は大和朝廷による東北地方抑えの拠点であるから、その職務上で「武門の統領」として「桓武平氏」と称されるようになったのである。平国香は高望の子であり、父親と同じ様な職務に就くことが出来た。鎌倉時代以前の筑波山周辺は殆どが桓武平氏高望流を伝える多気大掾氏（当主・太郎義幹）の領地であった。第二章で述べたように国府の役人として一時的だが石岡に勤務していた平国香の長男（貞盛）は、都暮らしに戻る為に弟の繁盛に家督

を譲ったから、桓武平氏高望流の直系は平繁盛に移ったことになるので、後に天下に君臨する平清盛は貞盛の系統であるから厳密には平氏の嫡流からは外れたことになる。清盛の父や祖父たちは、それを承知しているから自分たちのことを「伊勢平氏」と称していたようである。

時は鎌倉時代の初期、常陸国の中心部に「桓武平氏高望流（常陸平氏）」の正統を継いで来た常陸大掾職・多気太郎平義幹は源平合戦以降の急激な社会情勢の変化により敢え無く没落してしまう。それは時代の流れと言うには疑問のある歴史上の有名な事件に巻き込まれるようにして起きた。

第三章でも触れたが、有名な「富士の裾野の仇討」は実は曾我兄弟に仮託した「源頼朝暗殺未遂事件」だと言われている。この計画では頼朝の側近として力を持ち始めた工藤祐経が頼朝と共に消される予定であったけれども、ちよつとした手違いで本命の頼朝は生き残り、ついでに暗殺される筈の祐経が命を落とすことになった。さらに「ついで」の方が上手く行き過ぎて、常陸国では八田知家が仕掛けた策に多気義幹が乗せられ「いざ鎌倉！」で飛んで行かなかつたから常陸国の広大な領地を全部取られてしまった。工藤祐経と多気義幹とは近い親戚筋になるのである。そして没収された義幹の領地は暗殺計画の黒幕である北条時政と八田知家と事件の協力者Aとで分けられた。

テレビドラマでも一番先に怪しまれるのは事件で利益を得る人物であるから、思わせぶりに「協力者A」などとしたが、ズバリ言えば没収された領地を頂戴した馬場資幹（すけもと）であろう。つまり、この三人で多気大掾氏が持っていた広大な領地を分けたと推定される。北条と八田は筑波山

周辺から南麓にかけてのチキンで言えばササミの辺りを御馳走になり、その他は馬場が貰った。トランプなら「ババ」は損なのだが、この場合は「棚から牡丹餅」どころか、持てないようなお供え餅が転がり落ちて来たのが馬場氏である。

この様にして大掾の支流である馬場資幹が国府近辺から水戸までの領地を頂き、大掾本流として水戸と石岡に城を構えていた。しかし源頼朝が律令制度の統治機構を無意味のものとす改革を強引に行ない「守護、地頭」を設置したため「大掾」の職務も権限も無力化した。馬場資幹は頼朝が信仰する鹿島神宮の祭祀を継承することで存在意義を主張した。その中に神仏混淆の影響で神社は寺院に支配されるようになり、神社にも「神宮寺」が置かれた。大掾氏の子孫は「青屋神社」の祭祀を存続の楯にしたけれども、それさえも早い時代から在地豪族で大掾氏を補佐する立場の税所氏が行うようになっていたようである。

馬場系大掾氏の八代目に当る詮国（あきくに）は、室町時代に起こった「難台山城の攻防戦」に寄せ手として出陣しながら城方に通じた疑いで水戸近辺の広い領地を没収された。その息子の満幹（みつもと）は「上杉禅秀の乱」に加担して反乱軍に登録されてしまった。この事件は京都に居た将軍と、出先機関として鎌倉に居た管領（かんれい）との足利氏同族争いが絡んでいるから、基本的には管領に対して補佐役の上杉禅秀が反抗した事件であり、将軍・禅秀連合軍と鎌倉管領軍との戦いになる予定であった。全国区の将軍と、関東地方区の管領とでは格が違うから、連合軍が勝つ戦さなのだが、禅秀側がつい欲を出して将軍の座を狙う素振りがあり、両方の親玉を敵に回すこと

になってしまった。これでは勝てる道理が無い。

現代の政治でも、どの政党、どの派閥に付くかは運命の分かれ道になるが、選挙と政権は福引と同じで外れは外れであるから当たらなければ何もない。この場合も大掾氏は禅秀側に付いたので、そこで没落しても文句は言えないのだが、奇跡的に「水戸城没収」の沙汰で済んだ。忠臣蔵の大石内蔵助のように潔く城を諦めれば良いものを、管領の命令を無視して所有権を失ったのに水戸城を明け渡そうとしなかった。その結果、結局は新しい所有者の江戸氏に水戸城を奪取され、それ以来、府中城だけに籠って没落の一端を辿り小田氏にも本城を奪われたりしながら、天正十八年の暮には征服欲の強い佐竹に攻め込まれて消滅する。同じ頃に小田も佐竹に喰われたから、筑波山の良く見える地域一帯は佐竹領になっていた。

（続く）

【風の談話室】

年明け早々とつつか、昨年末以来と言おうか、あまり嬉しくない話題が次々に起こってくる。話題が豊富と言つのは良い事なのであるが、どちらかと言つと嬉しくない話題が次々と湧いて出る様である。

これが二十一世紀の世の中起こる話しか。時代錯誤も甚だしい、と言える話が満載状態である。昨年末に、世界の終焉と言われた予言も何事もなく過ぎて行ったのであるが、人類を俯瞰してみると確実に終焉に向かっただ走っているように思

われてならない。

何とかもつと明るい、希望的な話題はないものだろうか。

【ヨイシヨ広場】（陸平をヨイシヨする会）

霞ヶ浦湖畔ウォーキング 田島早苗

一月二十六日、美浦村主催の霞ヶ浦ウォーキング大会が行われた。大寒波襲来予報の中、若男が文化財センター駐車場に集合。「最高齢は七十九才から七才まで六十名参加」という係員の言葉に周りを見回し『最高齢は私なのだ』と納得。

「田島さんあまり無理しないで良いから」

十二キロを歩き通せるか心配した係員の優しいお言葉を承って、自分では元氣一杯足取りも軽く？出発したつもりだったが、たちまち最後尾になり、大宮神社から馬掛へ抜ける裏道では落ち葉が滑ってスッテンコロリ「年齢のせい」と言われないようにすぐに飛び起きたが、恥ずかしいやら悔しいやら、何処も痛めなかったのがせめてもの慰めだった。

私の歩調に合わせて歩いて下さる友や、未だ四十代の健康介助の人に「昔は狸の出そうな細い路だったのよ」などと知ったかぶりを振りまきながらゴルフ場の横の路を通り抜けると一気に眼の前が広がり、遙か向こうには輝く霞ヶ浦、空は何処までも澄み渡り真正面にくっきりと見える遠筑波の美しさ。最早先頭集団の姿は見えず、長々と伸びた最後尾の私達は、目一杯風景を楽しみながらいよいよ遅れるばかり。遅れを取り戻す為、第一回目のトイレ休憩は素通りして、霞ヶ浦沿いの道

を歩き出した頃には、先を行く皆さんの姿もまばらになり気は急いても速度は落ちるばかり、途中から後尾を走って下さっている随伴車の迷惑も考えず、とにかく歩き通せばいいとばかり、素晴らしい天気を愛でながらマイペースの四人組。

そう言えばあの時もそうだった。突然昔体験した筑波登山の記憶が甦った。三十数年前、末の娘の「小学校卒業記念筑波登山」にPTA役員として付き添うことになり、自分では子供達の面倒を見るつもりで張り切って登り始めたが、たちまち遅れてしまい、それでも同じ速度の男の子も居て、安心しながら歩いてきた。あと少しで頂上にたどり着くかと思っていたら「聡子ちゃんのお母さん、もう面倒見切れないから先に行くよ」の声と共に一緒に歩いてきた男の子が脇をすり抜けて早足で登り始め、あつという間に姿が見えなくなってしまう。面倒を見るつもりで面倒見られていたと知ったときの情けなさと温もりは、あの時こみ上げてきた涙の味と共にしっかりと記憶の引き出しに収められていた。

さて寒波襲来の予報に合わせ厚着してきた私は第二休憩所（因みにトイレなし）でセーターを一枚脱ぎ、以前よく歩いた道を懐かしみ、此処でも知ったかぶりを振りまきながら歩いてきたが、昔鹿島航空隊霞ヶ浦駐屯地だった兵舎跡は美事に変貌を遂げていた。

時々大きな魚が打ち上げられ異臭を放っていた湖岸はすっかり整備され、破れ兵舎が取り払われた跡地には大きな機械が入り、何か大々的な工事が始まっていた。国有地なので村職員もあまり良く判らない様子で「何でも東京が震災に遭った時の避難所を作っているらしいよ」と頼りない答え

が返ってくるばかり、句材を探して仲間と吟行した趣のある場所が、又一つ消えていく。

春や夏には、魚釣りや、ウォータースポーツで賑わう湖岸の娯楽施設整備も始まっていた。「これで美浦の観光の目玉が増えるかな？」と思いがながらも見知らぬ土地に来たような違和感に戸惑い益々のろくなる足。

第三の休憩所には地区のボランティアの仲間が美味しい豚汁を用意して待っていて下さることになっていたが、こんなにも遅れてしまつては？と心配になってくるほど引き離されて、漸くたどり着いた大山東部集落センターには、優しい笑顔と熱々の豚汁が待っていた。身も心も温まり、残る四キロ完歩を目差し最後の力を振り絞って出発。戦後の食糧難時代に始まり、米が余りだしてから完成した余郷入り干拓田の承水路脇をひたすら歩く。干拓当時は塩害もあつたという開拓田は、今では美味しいお米の実る美田になっているらしいが、私は情緒溢れる余郷入りの景観を見たかったと秘かに呟きながら。

それにしても最後の四キロは辛かった。友達が突然大声で童謡を唄歌い出したのには驚いたが、きつと彼女も辛いのだろうと、黙って納得していた。やつとの思いで辿り着いたゴールはすでに解散されていて閑散としていた。係の人に記念のタオルを頂き、歩き通した満足感と共に、遅れたお蔭で他の人と少しも交流できなかった寂しさに包まれて七十九才のウォーキングは終わった。最後までおつきあひ下さった皆さん有り難う。人はいつでも誰かに支えられているのを実感した貴重な体験だった。

菅原茂美の「コーヒープレーク」

『L.ロリ菌の功罪』

人体の総細胞数は約60兆個。人間の遺伝子数は約25000。しかしL.ロリ菌は自分の遺伝子のみでは生存できない。

一方人体に寄生共生する細菌は約1000種。その遺伝子数は300万。細菌の総数は1000兆個と言われる。人体はその細菌の助けにより生存ができる。例えば、ビタミンB12を作る遺伝子は人間には無いが細菌が作ってくれる。更に植物繊維の多糖類を「ブドウ糖」まで分解して吸収できるのもL.ロリ菌のおかげである。

さて、らせん状のヘリコバクター「L.ロリ菌」は、1983年、オーストラリアのウォーレンとマーシャルにより発見された。彼等はL.ロリ菌の感染は、胃潰瘍、胃癌を引き起こすと発表。マーシャルは、培養したL.ロリ菌を自飲実験で急性胃炎を発生し証明した。しかし除菌をすると、胃がんは防ぐが、食道がんが増えることから、L.ロリ菌には食道がんを抑える効果があることが示唆された。

「ニューヨーク大学のブレイザーは、胃が分泌するホルモンで食欲を増進する「グレリン」は、L.ロリ菌が分泌する「ソルトロール」していることを発見した。L.ロリ菌を除菌すると、食欲増進と抑制のバランスが崩れ、肥満者が増える。現在アメリカでは、新生児の3分の1が帝王切開で生まれ、母乳を飲まず育てられ、子供のL.ロリ菌保有率は6%に過ぎず、肥満児増加の一因ともいわれる。その他、子供は中耳炎、蓄膿症、力などで抗生物質を多用され、色々の共生菌がダメージを受け、腸内での樹状細胞やT細胞の免疫機能の連携が損なわれていると言われる。

ことば座・朗読舞東京公演決定!!

10月23日～35日 両国・シアター・X(カイ)

ギター文化館発:常世の国の恋物語第33話

ホルスト作曲「日本組曲」を主題とする平将門伝説

朗読舞劇 苺萱姫物語

- ・ヨネヤマ ママコのダンスマイム
- ・小林幸枝の手話舞
- ・柏木久美子のテンジェスチャー

**三つのジェスチャーが一つの舞台を創り上げる
世界初の舞台!!**

脚本：演出 白井啓治

音楽監督 橋爪恵一

編 曲 山本 光

演 奏 カメレオンオーケストラ

舞台背景画 兼平ちえこ

人の世はしばし旅居の仮り枕
命の永久になかりせば
仮りの枕に欲の積めども
明日の夜明けの見るは難し
明日の夜明けの見るは難し

ことば座 〒315-0013 茨城県石岡市府中 5-1-35 Tel 0299-24-2063 fax 0299-23-0150

【「とび座だよ」】

ヨネヤマ・ママコさん出演決定 小林幸枝

昨年未の末に、東京公演が両国の「シアター・カイ」で十月二十三日から二十五日まで行われることが決定しました。そして、そのすぐ後に伊藤道郎さんから教えをうけたパントマイムのヨネヤマ・ママコさんが、この公演で共演して下さるとの話を聞かされた。

今年一月に入り、白井先生が音楽監督の橋爪恵一さん、ヨネヤマ・ママコさんと打ち合わせをして決定したのでした。そして、その知らせを貰った時に、ギター文化館主催、ことば座協力の「里山と風の声コンサート」にママコさんが、サブライズゲストとして、橋爪さんへの友情出演をして下さることになりました。

私達聾者にとって、パントマイムは大変身近な表現なのですが、日本を代表するママコさんのパントマイムをギター文化館で、しかも私が朗読手話舞をしているフロアーで観る事が出来るとは思ってもいませんでした。ママコさんの舞台表現を確りと見学させていただき、十月公演ではママコさんのご厚意を汚さないように、自分の表現を創り上げて演じたいと思っています。

二月からは、柏木久美子さんの指導を受けながら、舞の基礎を学び、小林幸枝ならではの大きな手話舞を創り上げて行きたいと思っています。

今年、ことば座にとっても、私にとっても素晴らしい一年となりそうです。

皆様の応援よろしく願います。

願えば叶う

白井啓治

今年五月で、私が演劇の世界に足を踏み入れて満五十年になる。しかし、まるまる五十年を演劇に身を置いていたわけではない。演劇に踏み込んで五年ほどは演劇界をほつき歩いたが、嫌になつて映像の世界に転じ、脚本・監督となり、日本シナリオ作家協会に会員として所属した。

映像の世界では作品の満足度は別にして、何かをやり残したという思いはなかった。十分すぎる脚本を書きなぐり、監督としての現場もぶつ倒れるほどこなしてきた。だが、演劇に関してはやり残し所か何もやらないまま終わりにするところであった。

しかし、人生不思議なもので、満願とは言わなくても三分の一でもと真面目に願っていると、願いは叶えられるものである。

一切の仕事を止め、何もせずただただ呆けたような暮らしをしてやろうと、石岡にやって来たのであったが、偶然にも、どうか奇跡的な出会いを得て、やり残し感の大きかった舞台表現を再開させることになったのであった。

聾者である小林幸枝と出会ったときに、この人の手話の中に秘められている圧倒的な表現スケール感は何なんだと驚かされた。私の演出家としてのキャリアが無かったら、唯の手話としか認識できなかったのであるが、演出家としての目には仰天の表現のスケールとして映ってしまったのであった。その出会いによって、やり残した舞台表現を再開させることになったのであった。

とは言え、この閉鎖的な石岡という地で劇団を始めようと考えると、その人材育成は不可能に近

いものであった。もつとも人材育成の進まないのは今でも同じであるが。

それで、まずは小林と二人でも表現活動が出来るようにと、朗読を手話の舞に舞うと言う「朗読手話舞」という表現スタイルを創出し、ことば座を立ち上げ、活動を開始したのである。

タイトルに「願えば叶う」としたのであるが、ことば座を立ち上げた当時は、願えば叶うなどと考えることは出来ないものであった。朗読の出来る俳優を育てようと思うも、来る人は三百で脱落。結局は、自分で朗読をしなければならぬ。ある意味お先真っ暗の状態であった。

しかし、必ず評価を得られる舞台を創り上げるのだからね、と小林に言い聞かせ、それに向けての歩みを止めなかった。歩みを止めないことで、先ず劇団としての発信基地となる場を、ギター文化館に置く事を代表の木下氏から快諾いただく事となった。それによってギター文化館発「常世の国の恋物語百」へ挑戦しようと言う確かな目標が定まったのであった。

発信基地が決まり定期的に公演の発信を始める、そこに新しい協力者が現われた。オカリナ奏者の野口喜広さん・矢野恵子さんのお二人である。お二人の協力参加で、朗読舞の表現力は大きく飛躍した。特に小林の舞の創造に大きな変化が生まれたのであった。

この時に思ったのは「願えば叶う」であった。成功を願う、それに向けての確かな行動を創れば必ず叶う、そう思ったのであった。

ことば座を設立して二年目頃であったろうか。美浦村の市民劇団を主宰されている市川紀行氏との交流が始まった。そして、5年目を迎えるとき

に市川氏より、現代舞踊家の柏木久美子さんを紹介され、一緒に舞台を創る事となった。

柏木さんが伊藤道郎の孫弟子にあたる事を知り、ことば座を取り巻く環境は一変することになった。私が演劇に足を踏み入れた時には、伊藤道郎氏は亡くなられていたが、その足跡、偉業は十分に承知していたし、私の年令以上の人で演劇に関係する者は知らない人はいない。

柏木さんがその孫弟子であったことは驚きであったが、伊藤道郎亡き後結成されたミチオイトウ同門会があり、そこに私のごく身近だった人がいることに驚かされた。狭い業界だから、それは当然のことであるのだが、矢張り驚きであった。柏木さんは現在の同門会の会長されている。

その柏木さんから、伊藤道郎のためにホルストが作曲した「日本組曲」と言うのがあるのだけれど、伊藤道郎もその曲の完成を知らなかった。その曲を使って一度踊ってみた、との話を聞かされた。私は、何でもやってみようかと思ったら先ずはそれにトライしてみる、と言う考えなので、柏木さんにホルストの「日本組曲」のコピーを頂き、聞きながら舞物語を思案したのであった。

日本組曲を聞いて、天才作曲家の物語を誘引する力の大きさに脱帽した。この組曲からはどんな物語でも作れると確信したのであった。

以前から平将門をモデルとした常世の国の舞物語を考えていたのであったが、柏木さんから曲のコピーを借りるときに、偶然であるが美浦村に伝わる伝説をまとめた絵本を見せて貰ったのであった。そこに将門伝説として苜萱姫物語が書かれていたのであった。その伝説は、脚色すれば「常世の国の恋物語」として十分成立するものであった。

柏木さんには、とにかく一度トライしてみて、行けると確信が持てたらオーケストラを使つての舞物語を東京公演として持つて行くことを考えようと、昨年六月の定期公演でトライしてみたのであった。

その後が奇遇の連続である。日本組曲の一部を用いての試演を行つてみて、これは行けるぞと言うある種の感が働き、ならば音楽監督を探さなければ、となり思いついたのは私の下で一緒に仕事をしていた塩見さんのご主人がクラリネット奏者で自らカメレオンオーケストラを主宰していることを思い出したのであった。

塩見さんは今ではプロデューサーとして色々な事を手掛けているのであるが、中でもパントマイムのヨネヤママコさんとは仲が良く、よく仕事をしている。そのヨネヤママコさんが、実は伊藤道郎との関係が深く、踊りの指導ばかりではなくママコさんがアメリカに行くにあたってのアドバイスなども受けたのだと言う。伊藤道郎は、ママコさんがアメリカに渡つて直ぐに亡くなっているのである。いわばママコさんは最後の直弟子と言つても不思議の無い人だったのである。

そんな縁が繋がり、計画を始めていた「ホルスト作曲・日本組曲を主題とする将門伝説・苜萱姫物語」が、今年の十月二十三日〜二十五日で両国のシアター・カイで公演することが決まり、そこにママコさんが出演して下さることになった。

そしてこの話が切っ掛けとなって、四月八日にギター文化館で行う「里山と風の声コンサート・橋爪恵一パフォーミング・アーツ2013春」にサプライズゲストとしてヨネヤママコさんが友情出演して頂けることになった。

全く持つて不思議な縁の転がりである。不思議の縁の転がりの中で、改めて「願えば叶う」を思わずにはいられない。「願う」とは、大きな頭と言う意味で、転じてねがうとなったのだと言う。願うと言うのは何かに頼むということではなく、自分の頭で考えて行動すると言うことに他ならない。確り考え行動すれば、思いが叶うのである。願いがかなわないのは確り考えて行動しなかったということなのであろう。

立春が過ぎ、東風が吹き氷が解けるのだという。春はもう隣に座っているのだらう。だが、中国から汚染された黄砂が吹いてくるのだけは勘弁してほしいが、昭和30年代は、東京と言えはスモッグの町で隅田川からはドブの臭がしていた。

《ふる》 アレンジ・書装・書装会館料理のお店です。

(ギター文化館連中)

看板娘(犬)「うらら」ちゃんが

皆さんをお迎えいたします。

電話0660-43-00008

編集事務局 〒315-0001

石岡市石岡13979-2

TEL 0299-24-2063

(白井啓治方)

<http://www.furusato-kaze.com/>

ギター文化館 2013 CONCERT SERIES

第四回 『里山と風の声』コンサート

4月7日日曜日 (14:30 開場 15:00 開演)

橋爪恵一のパフォーミング・アーツ2013春

クラリネットの奏でる風に乗って里山の木々が声をする

パントマイム界の巨星、ヨネヤマ・ママコさんが

サプライズ・ゲストとして友情出演!!

里山に風のマイムが舞い降りる。

第一部 朗読里山の詩

ことば座「常世の国の恋物語百」に紡がれた恋歌を里山の風の声として作者、白井啓治が朗読する。

第二部 橋爪恵一のパフォーミング・アーツ2013春

「クラリネットの魅力&パントマイムの基本」

木管楽器であるクラリネットの魅力的な響きに加え、日本のパントマイム・アーティストの第一人者のヨネヤマ・ママコが伝えるマイムの基本。

歩く・走る・浮かぶ・飛ぶ…。

軽やかな音楽とダンスマイムでお届けする、小粋でワクワクする時間をお楽しみください。

ピアノ伴奏は山本光。

里山に風が流れるとき
言葉がうまれ詩が生れる
耳を澄ませば
ふる里の音が聞える
里山に風が吹き雑木林の葉々たちの
拍手する声が聞える

(ギター文化館にて…)

※コンサート料金 3500円 (事前購入 3000円) 小・中学生 2000円

ギター文化館 〒315-0124 茨城県石岡市柴間 431-35 Tel0299-46-2457 fax0299-46-2628